

## 平成 26 年 4 月 18 日 オリンピック・パラリンピック推進対策特別委員会

○小林委員 簡潔に四点お伺いをいたします。

二〇二〇年の東京大会は、都市の中心でコンパクトな大会というコンセプトを掲げており、オリンピックスタジアムとなる国立競技場を中心とした内陸部のヘリテッジゾーンと、東京湾臨海地域における東京ベイゾーンの二つのエリアに分かれております。

ここ最近、地域の行事などにお伺いし、このようなオリンピック・パラリンピックの概要をお話しすると、皆さん大変に関心を持って聞いてくださいます。特にご年配の方に、競技会場が集積をする東京湾臨海地域に最近行かれたことがあるかお聞きをすると、ほとんどの方が行かれたことがなく、臨海地域といっても、ぴんとこられていない様子もありました。

先ほども話がありましたように、先日、東京ベイゾーンにおける施設建設予定地を視察してまいりましたが、長年、東京に住んでいる方々でも、新たな東京の魅力を発見できるエリアであると実感をいたしました。

今後、多くの都民の方々に二〇二〇年の東京大会を思い描いていただけるよう、現在の東京を知っていただくことも大切であるというふうに考えます。

そこで、中心的に競技が実施されるヘリテッジゾーン、東京ベイゾーン、それぞれのエリアの特徴についてお伺いします。

○根本オリンピック・パラリンピック準備局競技担当部長 ヘリテッジゾーンでございますけれども、国立代々木競技場、日本武道館など、一九六四年東京大会のために建設された施設を競技会場として使用するなど、六四年のレガシーを今に語り継ぐエリアでございます。七つの競技会場が位置してございます。

東京ベイゾーンは、東京湾の臨海部に位置しまして、東京の未来への発展を感じさせるエリアでございます。二十一の競技会場のほか、国際放送センター及びメインプレスセンターが設置されます。

これら二つのエリアにあります二十八の競技会場は、選手村から半径八キロ圏内に位置し、選手を最優先に考えた極めてコンパクトな配置となっております。

○小林委員 競技会場の八五％を、選手村を中心として半径八キロ圏内に配置するというコンパクトさは、選手や大会関係者、観戦者の移動時間が短くて済むというメリットがあり、大きな特徴であると思いますが、その反面、先ほどの質疑の答弁でもありましたが、大会開催期間中の観戦者、また大会関係者数は一千十万人、一日当たり九十二万人と予測されておりますが、半径八キロ圏内に人が密集することとなると思います。

オリンピック・パラリンピックの開催期間中とはいえ、近年、東京として経験したことがないであろう人口密集地帯ができるわけであり、当然のことながら、事故や事件など混乱を生じないように、綿密な計画が求められます。それらの対策にはさまざまな観点が求められますが、特に人の移動をいかに円滑にしていかが重要であると思います。

半径八キロ圏内の人口密集地帯にあって、選手や大会関係者、観客の移動、輸送につい

ての見解を伺います。

○荒井オリンピック・パラリンピック準備局輸送担当部長 二〇二〇年大会は、競技会場等を半径八キロメートルというコンパクトなエリアに集中的に配置することにより、効率的な輸送を可能としています。

輸送の考え方についてであります。選手や大会関係者につきましては、バスや乗用車を利用して輸送いたします。その際、選手や大会関係者専用の車線となるオリンピックレーンを首都高速道路を中心に設定し、安全で円滑な輸送を図ります。

一方、観客及びボランティアなどの大会スタッフについては、稠密な公共交通機関を最大限活用して輸送する計画でございます。

○小林委員 一方、大会期間中といえども、日常の都民生活は続いております。昨年三月に総務局がまとめた東京の昼間の人口は一千五百五十八万人、夜間人口は一千三百十六万人で、昼間の就業者は八百十七万人、通学者は百七十八万人、東京都への近隣県からの流入人口は二百八十九万人となっております。通勤通学を初め、日常生活への影響を最小限にしていく対策も当然必要になってまいります。

そこで、大会開催期間中、都内における日常の輸送への対応について見解を伺います。

○荒井オリンピック・パラリンピック準備局輸送担当部長 オリンピックレーンの設定により、競技会場周辺等における一般交通への影響が生じることが予想されます。

立候補ファイルにおきましては、一般交通への影響を最小限とするため、都心部への一般車両の流入を抑制する方策として、公共交通機関の積極利用や代替ルートの利用の促進等を実施することとしています。

これらの実施に当たりましては、交通管理者や公共交通事業者等との連携が必要不可欠でありまして、関係機関の協力を得ながら具体的な検討を行ってまいります。

あわせて、都民の理解及び協力を得るため、情報発信を積極的に行ってまいります。

○小林委員 多くの都民の方々も初めて経験する都内の一大イベントであり、東京がどのような状況になっていくのかも予測がつかず、戸惑うこともあるかと思えます。いずれにしても、都民の皆さんによくよくご理解をいただき、一体となっていかなければ成功をおさめることはできませんので、都民への情報発信を初め、企業や交通事業者との緊密な連携と協力をお願いしたいと思います。

最後に、施設整備についてお伺いします。

今年度より新規施設の基本設計も始まることとなり、平成三十一年度のテストイベント開催に向けて着実な整備促進を行っていかねばなりません。

東京ベイゾーンの施設建設予定地を視察した際、絵図や文字の資料ではわからない現場の状況、雰囲気を感じることができました。

新規に整備する施設は、東京大会終了後も恒久的に都民のために活用される施設もありますので、都民の関心は今後ますます高まっていくものと思えます。

そこで、新規施設の整備に当たって、基本設計など、施設計画において重視し留意する点についてお伺いをいたします。

○小野寺オリンピック・パラリンピック準備局施設整備担当部長 競技会場は、競技を行う選手にとって最高の環境になるとともに、運営を担う関係者にとって使いやすく、かつ観客にとっても快適に観戦できるような施設整備への取り組みが必要でございます。

また、昨今の建設資材や労務費高騰への対応、維持管理しやすい設備計画など、建設から運営までのライフサイクルコストに配慮した検討も必要となってまいります。

こうした視点に留意するとともに、大会後も都民の貴重な財産となり、末永く親しまれるレガシーとなるよう、今後、競技会場の基本設計に取り組んでまいります。

○小林委員 東京ベイゾーンの建設予定地を視察し、私自身も、改めて、この東京の魅力を実感することができました。水と緑、生物多様性を特徴とした、今までにないオリンピックの環境を演出していけるものと思います。

外国人観光者も、この臨海副都心地域の魅力を実感しているようで、「ゆりかもめ」に乗って、臨海地域の美しい夜景を動画で撮影し、ユーチューブに投稿しているとも聞いております。

東京大会招致に向けたスローガンはディスカバー・トゥモローですが、まさに二〇二〇年に向けて、私たち都民が新たな東京の魅力を実感し、東京の未来を発見する絶好の機会にしていくことが大事であると思います。

冒頭にも申し上げましたが、長年、東京に住んでいても、東京の多様な魅力を感じるものがなかなか日常的にない中で、二〇二〇年までのこの六年間は、東京が変わりゆくさまを肌で感じていける貴重な時間ではないかと思えます。

世界へ発信することはもちろんのこと、住んでいる私たち都民が誇りに思い、魅力を堪能できるような東京の姿を都民、国民に対しても着実に発信していただくよう要望いたしまして、私の質問を終わります。ありがとうございました。